



里耶秦簡の医方で用いられる薬物の一考察：
菌桂を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池内, 早紀子, 山本, 優紀子, 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00016779

里耶秦簡の医方で用いられる薬物の一考察 - 菌桂を中心として -

池内早紀子、山本優紀子、大形 徹

はじめに

漢方医学を学ぶものには、重要だとされる書に『傷寒論』¹がある。傳世文献である『傷寒論』は久しく方書の祖であるとされてきた。一般的に、張仲景により後漢の頃成立したと言われる。ただし実際には『傷寒論』という書名は、後になってからのものである。『隋書』経籍志の「張仲景方十五卷」や「医方論七卷」の原注にある「張仲景弁傷寒十卷」がその原形に近いものと思われる。

近年多くの出土文献があり、この薬方の成立までを補完出来る可能性がでてきた。真柳は『五十二病方』→『六十病方』→『史記』倉公伝→『漢書』芸文志「経方」→『神農本草經』→『武威漢代医簡』→張仲景医方と変遷してきたと考えている²。2002年から2005年にかけて湖南省龍山県里耶古城遺跡の井戸より出土した里耶秦簡は、『傷寒論』の成立時期といわれる後漢よりも古く、また馬王堆三号漢墓より出土した『五十二病方』³や、老官山漢墓より出土した『六十病方』よりも古い秦末の遺跡からの出土である。

ところで、薬物は、そのイメージにより薬効を想定されることがある。たとえば「赤」い丹砂は、その「赤」が「血」の色であるため、古くは生命力と同一視され尊ばれた。それが、仙薬と関わることになったのではないが⁴。また明、李時珍『本草綱目』「芍薬」に「時珍曰く、白芍薬は脾を益し、能く土中に木を瀉す。赤芍薬は邪を散じ、能く血中の滯を行らす」⁵とあり、色により効能を分けている。

だとするならば秦簡に用いられる薬物はどのようなイメージであったのだろうか。とりわけ里耶秦簡の医方に「菌桂」の名で用いられる「桂」は、その後の『傷寒論』でも冒頭に取り上げられ、基本処方とされる「桂枝湯」の名に冠する。拙稿では、特にこの「桂」に注目してみたい。

¹ 『日本国語大辞典』第二版、小学館、2000年には、「中国の医書。10巻。後漢の張機（仲景）撰とも。建安10年（205）頃成立し、もと「傷寒雜病論」と称し16巻。晉の王叔和補修。現行本は宋の治平2年（1065）勅命で校訂。主に急性熱病（寒さあたり）の症状と治療法112例を詳述。漢方医学の聖典とされている」とある。

² 真柳誠「老官山漢墓出土『六十病方』の知見」、『日本東洋医学雑誌』第70巻別冊号、2019年。

³ 遠藤次郎、鈴木達彦「馬王堆出土『五十二病方』にみられる薬の作り方の意義」、『日本医史学雑誌』第55巻第2号、2009年では「先秦時代の著作と見られる馬王堆出土『五十二病方』」とある。

⁴ 大形徹「薬物から外丹へー水銀をめぐる古代の養生思想ー」、『道教の生命観と身体論』、雄山閣出版、2000年、pp. 62-78。

⁵ 李時珍『本草綱目』三版、国立中国医薬研究所出版、1988年、p. 495。「時珍曰、白芍薬益脾能於土中瀉木。赤芍薬、散邪能行血中之滯」

第一章 里耶秦簡の医方と藥物⁶

里耶古城遺跡の井戸より出土した簡牘は、湖南省文物考古研究所により整理され『里耶秦簡』全5巻として出版される予定である。このうち1、2巻が、既刊となっている。これを元に、医方或いは薬方⁷と思われるものを調査した。結果、第九層にもわずかにみられるが、それが多く含まれていたのは第八層⁸であった。判読が困難なものなどを除き紹介したい。

第八層簡牘

●第一、人少氣を病む者は人聲を聞くを惡^いみ、視ること能^よわずして善^い 暱^いみ、善^い 食すれども食すること能^よわず。食に臨^にみ臭^いを惡^いむ、赤雄雞冠丸を以^いける……⁹

●七、病暴^いにして心痛灼灼とする者、之を治す。析(薪)萁實、治^いすこと、二。枯樞(薑)、菌桂、治すこと、各一。凡そ三物并せて和し、取ること三指もて撮^いまみ、節二に到る、温醇酒。¹¹

九十八、治して金傷をして痛み毋らしむるの方。鼯鼠^いを取り、乾して……[長]石、辛夷、甘草^い各、鼯……と……。¹²

●暴に心痛するを治す方。令以……屋左……取其……草蔡、長さ一尺、禹歩すること三度、析きて、之を病者の心上に敷く。因りて左足以て……其の心を腫む、男子は十

⁶ 里耶秦簡にある始皇の仙薬探索などについては、大形徹「仙人の飲食」『人文学論集』36、2018年、pp. 1-41を参照されたい。

⁷ これらの薬方に関しては、張雷『秦漢簡牘醫方集注』中華書局、2018年を多いに参考した。

⁸ 湖南省文物考古研究所編著『里耶秦簡〔壹〕』文物出版社、2012年、釋文 pp. 9-110。

⁹ 「●第(第)一、人病少氣者惡聞人聲、不能視而善 I 8-1363 暱、善飢(食)不能飢(食)、I 8-1042 臨食而惡臭、以赤雄雞冠完(丸) □。II 8-1363」。原文は『秦漢簡牘醫方集注』に従い読み改めた。例えば、「第(第)」は「第」を「第」と読む。また、「[長]」は「長」を補っている。「□」判読不可を示す。

¹⁰ 段禎「簡帛醫書『治』字考」甘肅中医学院学報第26巻第6期、2009年によれば、「治」は「搗(つく)」と同義。

¹¹ 「●七、病暴心痛灼灼者、治之。析(薪)萁實、治、二。枯樞(薑)、菌 I 8-1221 桂、治、各一。凡三物并和、取三指最(撮)到節二、温醇酒。II 8-1221」

¹² 「九十八、治令金傷毋痛方。取鼯鼠、乾而因[長] I 8-1057 石、薪(辛)夷、甘草各與鼯 □。II 8-1057」 「[長]石」、『秦漢簡牘醫方集注』では、北京大学所蔵西漢竹簡醫書の「治令金傷毋痛方」により[長]を補う。

たび踵み、女子は七たび踵む。嘗試よ。禁毋し。¹³

……心腹痛むを治す、心腹痛む者、盈つるの状の如く糶然として出でて化せざるは、馬麥の恒の鬻一、魯く冷きたる麥糶三……を爲る。¹⁴

煩心を病むを治す。地穿つこと深さ二尺、方なること尺半、水三四斗を煮、沸し、……水地中に注ぎ、其の飲む可きを視、飲むこと一參。¹⁵

内¹⁶。病已ゆれば故の如くせよ。病を治するに時毋し。壹めて薬を治れば、病を治するに足る。薬已(已)に治れば、裹むに繪を以て臧(藏)す。妬(朮)を治るは、曝すこと燥なる所有るが若くす、冷く。¹⁷

……誨(晦)旦、食に先んじて温酒一柸(杯)を以て和し、之を飲(飲)み、莫(暮)に到りて有(又)た食に先んじて飲(飲)むこと、前の數の如し。恒に薬を泔(服)すること廿日、久しく病むと雖も必ず已(已)む。薬を服する時、禁じて彘肉を食らう毋かれ。¹⁸

第九層簡牘

癰¹⁹中。薬を傳くるに必ず之を先ず涵(洗)う。日に一たび涵(洗)い、薬を傳く。涵(洗)いて、薬を傳くること六十日、冢已ゆ。嘗試。¹⁹

衰藪(核)半升を加え湯に入れ、酒石、湯は苦を齎(もたら)しむるも、……を漬け湯中に入る

¹³ 「●治暴心痛方。令以口屋左□□□□取其□ I 8-876□草蔡長一尺、禹步三、析。専(敷)之病者心上。II 8-876 因以左足□踵其心、男子十踵、女子 I 8-1376 七踵。I 8-1959 嘗試。毋禁。II 8-1376」

¹⁴ 「□治心腹痛、心腹痛者 I 8-1718 如盈狀糶然而出不化。爲麥 I 8-258 恒鬻 II 8-1718 一、魯治麥糶(糶)三□。II 8-258」

¹⁵ 「治病煩心。穿地深二 I 8-1937 尺、方尺半、鬻(煮)水三四斗、潰(沸)、注□ I 8-1369□水地中、視其可飲(飲)、II 8-1937 飲(飲)一參。II 8-1369」

¹⁶ 房内のこと。

¹⁷ 「内。病已(已)如故。治病毋時(時)。壹治薬、足治病。薬已(已)治、裹以繪 I 8-1243 臧(藏)。治妬(朮)、暴(曝)若有所燥、治。II 8-1243」

¹⁸ 「□誨(晦)旦先食□ I 8-298 以温酒一柸(杯)和、飲(飲)之、到 I 8-1397 莫(暮)有(又)先食飲(飲)、如前數。恒泔(服)薬廿日、雖久病必已(已)。I 8-1290 服薬時禁毋食彘肉。II 8-1397」

¹⁹ 「癰¹⁹中。傳薬必先(洗)之。日一涵(洗)、傳薬。涵(洗)、傳薬六十日、癰已。嘗試。II 9-1633+9-2131」

れば、甘を齋しむ。以以湯顔黄²⁰……を齋⁴⁵る²¹

以上の医方からは、薬物を用いる医療的なものと、禹歩などを用いる呪術的なものとが入り交じっていることがわかる。

一方薬物に注目してみると、用いられるものは、「赤雄雞冠」「析(荝)萸實」「栴(朮)」「薪(辛)夷」「甘草」「麥鬻」「麥麩」「棗藪(核)」「枯樞(薑)」「鼯鼠」「長石」、そして「菌桂」の12種である。そこでこれらの薬物について、通説によれば後漢の頃に成立したといわれる『本草経』(『神農本草経』)²²などを引用して簡単に述べる。『本草経』は、神仙的要素をふくみ不老不死の仙薬を列挙するとも考えられている²³。また「菌桂」については次章で扱うこととしたい。

「赤雄雞冠」。「雞」はニワトリ・鶏 (*Gallus gallus domesticus*)²⁴である。『神農本草経』獣上品に「丹雄雞。味は甘、微温。女人、崩中漏下、赤白沃を主る。虚を補い中を温め、血を止め神を通じ、毒を殺し不祥を辟く。頭は鬼を殺すを主る。東門上なる者、尤も良し。……」²⁵とある。また『証類本草』²⁷ではここに「日華子²⁸に云う。朱雄雞の冠の血は白癜風を療す」²⁹と注している。「癜風」は皮膚病の一種で、皮膚表面に白色の斑片が現れるとされる。

「荝萸實」は「荝萸子」ともいい、オオナズナ (*Capsella bursa-pastoris*) 或いはグンバイナズナ (*Thlaspi arvense*) の種子である³⁰。『神農本草経』草上品に「析萸子。味は辛、微温。目を明らかにし、目痛み、涙出づるを主る。痺を除き、五臓を補い、精光を益す。

²⁰ 「以以湯顔黄」は不明。

²¹ 「加棗藪(核)半升入湯、酒石、湯令賤(齋)苦、漬口□ I 入湯中、令賤(齋)甘。以以湯顔鬻黄□ II 9-2296」

²² 小曾戸洋『新版漢方の歴史』大修館書店、2014年、p. 43に「神農に名を託した書に『神農本草経』という古典がある。これは個々の生薬(漢方薬)について解説したもので、後漢代(一〜二世紀)に成ったと推定される中国最古の薬物学書である」

²³ 岡西為人『本草概説』創元社、1977年、p. 17に「神仙説を奉じた方士たちによって編成されたものであろう」「神仙的と医療的との二つの要素が混在していた」大形徹「本草と方士の関係について」『人文学論集』8、1990年、pp. 47-66では、『本草書』と神仙説の関係について述べている。吉川忠夫「本草余聞」『杏雨』(21)、武田科学振興財団、2018年、pp. 139-193に「……『本草経』に列挙されている薬物が往々にして人々を不老長寿ならしめ、道教が最高の理想とするところの神仙へと導く仙薬とされているから……」

²⁴ 南京中医薬大学編『中薬大辞典』第2版上、2006年、p. 1677。

²⁵ 吳普述、孫星衍・孫馮翼輯『新版神農本草経』文光図書、2000年、p. 86に「丹雄雞。味甘微温。主女人崩中漏下赤白沃、補虚温中、止血通神、殺毒辟不祥。頭主殺鬼、東門上者尤良」

²⁶ 森立之『本草経考注』学苑出版社、2002年、p. 336。

²⁷ 『証類本草』は北宋後期に唐慎微が『嘉祐本草』と『図経本草』を併合したものを徽宗が勅命で二度修訂増補し、その二度目のものが『政和本草』といわれる。

²⁸ 「日華子」。『日華子諸家本草』

²⁹ [宋]唐慎微著、郭君雙・金秀梅等校注『証類本草』中国医薬科技出版社、2011年、p. 537。

³⁰ 赤松金芳『新訂和漢薬』医歯薬出版社、1970年、p. 400。

久服すれば、身を軽くし老いず。一名、蔑析、一名、大藪、一名、馬辛。川澤及び道傍に生ず³¹とある。

「辛夷」はモクレン科の望春花 (*Magnolia biondii* Pamp)、玉蘭・ハクモクレン (*Magnolia denudata* Desv) 武当玉蘭 (*Magnolia sprengeri* Pamp) の乾燥花蕾である³²。『神農本草経』木上品に「辛夷。味は辛温。五臓身体寒熱、風頭痛、面^{くろ}奸^ずむを主る。久服すれば、氣を下し身を軽くし、目を明らかにし、年を増し老に耐う。一名は辛矧、一名は侯桃、一名は房木。川谷に生ず³³とある。

「甘草」は豆科の植物、甘草 (*Glycyrrhiza uralensis* Fisch) の乾燥した根である³⁴。『神農本草経』草上品に「甘草。味は甘、平。五臓六府、寒熱邪氣を主る。筋骨を堅くし、肌肉を長じ、力を倍し、金創腫、解毒す。久服すれば身を軽くし年を延ばす。川谷に生ず³⁵とある。

「麥^{むぎ}」³⁶「麥^{むぎ}麴^{こうじ}」は、いずれも「麦」の加工品であることにはちがいないだろう。ただ麦には小麦 (*Triticum aestivum* L.)、大麦 (*Hordeum vulgare* L.)、雀麦 (*Herb of Japanese Bromegrass*) など多くの種類がありどれが用いられたのかは特定しがたい。麦類については、『証類本草』米穀部中品に「小麥。味は甘、微寒、無毒。熱を除き、躁渴、咽乾を止め、小便を利し、肝氣を養い、漏血、唾血を止むるを主る。以て麴³⁶と作さば、温。穀を消し、痢を止む。以て麴³⁷と作さば、温。熱を消し、煩を止むこと能わず³⁷、「大麥。味は鹹、温、微寒、無毒。渴を消し、熱を除くを主る。氣を益し中を調う。又た云う、人をして多熱ならしむ。五穀の長^た為^り」³⁸「麴^{こうじ}麥。味は甘、微寒、無毒。身を軽くし、熱を除くを主る。久

³¹ 『新版神農本草経』p. 38 に「析萸子。味辛微温。主明目、目痛、涙出。除痺、補五臓、益精光。久服、輕易不老。一名蔑析、一名大藪、一名馬辛。生川澤及道傍」

³² 『中葉大辞典』p. 1616。『第十七改正日本薬局方』では「タムシバ *Magnolia salicifolia* Maximowicz、コブシ *Magnolia kobus* De Candolle、*Magnolia biondii*Pampanini、*Magnolia sprengeri* Pampanini 又はハクモクレン *Magnolia heptapeta* Dandy (*Magnolia denudata* Desrousseaux) (*Magnoliaceae*)のつぼみ」

³³ 『新版神農本草経』p. 77、「辛夷。味辛温。主五臓、身體寒風、頭痛、面^{くろ}奸^ず。久服、下氣輕身、明目、増年耐老。一名辛矧 (御覽作引)、一名侯桃、一名房木。生川谷。」既出『本草経考注』では「辛夷。一名辛矧、一名侯桃、一名房木。味辛温。生川谷。治五臓、身體寒熱、風頭痛、面^{くろ}奸^ず。久服、下氣輕身、明目、増年耐老」とある。本文ではこれに従い改めた。

³⁴ 『中葉大辞典』p. 788。『第十七改正日本薬局方』では「*Glycyrrhiza uralensis* Fischer 又は *Glycyrrhiza glabra* Linné (*Leguminosae*)の根及びストロンで、ときには周皮を除いたもの(皮去りカンゾウ)」

³⁵ 『新版神農本草経』p. 18、「甘草。味甘平。主五臓六府寒熱邪氣、堅筋骨、長肌肉、倍力、金創腫、解毒。久服輕身延年 (御覽引云一名美草、一名密甘、大觀本、作黑字)。生川谷」

³⁶ 麴は麴におなじ。

³⁷ 『証類本草』p. 680、「小麥味甘、微寒、無毒。主除熱、止躁渴咽乾、利小便、養肝氣、止漏血、唾血。以作麴、温、消穀、止痢。以作麴、温、不能消熱止煩」

³⁸ 『証類本草』p. 682、「大麥味鹹温微寒無毒主消渴除熱益氣調中又云令人多熱為五穀長」

しく服すれば人をして多力健行ならしむ。以て薬と作さば、温。食を消し中を和す³⁹とある。また「麴」は「イネ科の植物に *Aspergillus sp.* 或いは *Rhizopus sp.* の菌類を繁殖せしめたもの。薬用には小麦麴、大麦麴、麩麴、米麴等⁴⁰であり、また『証類本草』米穀部中品に「麴。味は甘、大暖。藏腑中風気を療す。中を調べ、氣を下げ、胃を開き宿食を消す。霍亂、心膈氣、痰逆を主り、煩を除き癥結を破り、及び虚を補し冷氣を去りて、腸胃中の塞りて食を下さざるを除く。人をして顔色有らしむ。六月に作す者は良し。陳久なる者は薬に入れ之を用う。當に炒りて香らしむべし。六畜米を食らいて脹りて死せんと欲する者は、麴汁を煮て之に灌げば立ちどころに消ゆ。胎を落し、並びに鬼胎を下す。又た神麴、無毒ならしむ。能く水穀宿食癥氣を化し脾を健やかにし胃を暖む⁴¹とある。

「棗核」はナツメ (*Ziziphus jujuba Mill.*) の果核である⁴²。その果実は「大棗」である。「大棗」は『神農本草経』上品に「大棗。味は甘、平。心腹の邪氣を治し、中を安んじ脾を養い、十二經を助け、胃氣を平かにし、九竅を通じ、少氣少津液を補い、身中の不足、大驚、四肢重きを主る。百薬を和す。久服すれば身を軽くし年を長くす。葉もて麻黄を覆わば、能く汗を出でしむ。平澤に生ず」とある。

「枯薑」は、「乾姜」と解される。薑・ショウガ (*Zingiber officinale Rosc.*) の根茎を乾燥したものである⁴³。『神農本草経』中品に「乾薑。味は辛、温。胸滿して、咳し、氣逆上するを治し、中を温め、血を止め、汗出だし、風濕痺を逐い、腸澀下利するを主る。生なる者尤も良し。久服すれば臭氣去り、神明を通ず。川谷に生ず」とある。

「鼯鼠」は、ヒガシモグラネズミ (*Myospalar psilurus*)、シナモグラネズミ (*Myospalar fontanierii*)、モンゴルモグラネズミ (*aspalax fontanierii*) の総称⁴⁴。陳蔵器『本草拾遺』鼯鼠壤堆上土に「苦酒和し泥と爲し、腫に傳く、極めて効あり。又云う鬼疰氣痛、土を取り秫米の泔汁を以て 搜し餅と作し、燒きて熱せしめ、物を以て裹み痛き處を熨す。凡そ鼯鼠は是れ野田中の尖嘴なる鼠なり⁴⁵とみえる。モグラに似た小動物であろう。

「長石」は、チョウセキ (feldspar) アルミニウムを含む珪酸塩鉱物⁴⁶。『神農本草経』中品に「長石。味は辛寒。身熱、四肢寒厥、小便を利し、血脈を通じ、目を明らかにし、翳

³⁹ 『証類本草』p. 683、「櫛麥味甘微寒無毒主輕身除熱久服令人多力健行以作藥温消食和中」

⁴⁰ 『新訂和漢薬』p. 637。

⁴¹ 『証類本草』p. 682、「麴味甘大暖療藏腑中風氣調中下氣開胃消宿食主霍亂心膈氣痰逆除煩破癥結及補虛去冷氣除腸胃中塞不下食令人有顔色六月作者良陳久者入薬用之當炒令香六畜食米脹欲死者煮麴汁灌之立消落胎并下鬼胎又神麴使無毒能化水穀宿食癥氣健脾胃」

⁴² 『中薬大辞典』p. 1851。

⁴³ 『中薬大辞典』p. 552。

⁴⁴ 『中薬大辞典』p. 3787。主治は、「清熱解毒」「活血散瘀」和名は、川田伸一郎等「世界哺乳類標準と名目録」、『哺乳類科学』第58巻別冊、2018年に拠る。『名医別録』「鼯鼠」(モグラ)の陶弘景注には「一名鼯鼠」とある。

⁴⁵ 陳蔵器『本草拾遺』739年。(唐)陳蔵器撰、尚志鈞輯『本草拾遺輯』安徽科学技術出版社、2002年、p. 34。「鼯鼠壤堆上土。苦酒和爲泥、傳腫極效。又云鬼疰氣痛、取土以秫米泔汁搜作餅、燒令熱、以物裹熨痛處。凡鼯鼠是野田中尖嘴鼠也」

⁴⁶ 『中薬大辞典』p. 626。

を去り、^{すうめ} 眇、^{さんちゅう} 三蟲を下し、^{じく} 蠱毒を殺すを主る。久服すれば飢えず。一名方石。山谷生ず⁴⁷とある。

この他、残方において用いられる薬物として「^{らんぼん} 蘭本」「^あ 艾」「^{しんじばかま} 葶」「^{うず} 芒」などがみられる⁴⁸。以上の薬物は、ほとんどが『神農本草経』に記載される薬物であった。

第二章 桂・菌桂と月の桂樹

次に、『里耶秦簡』の内容を解明する一助として桂について検討する。すなわち「^{きんけい} 菌桂」あるいは「^{けい} 桂」「^{けいひ} 桂皮」「^{けいじ} 桂枝」などとよばれる薬物について述べたい。真柳にしたがいがい、ここではこれを桂類薬物とよぶ⁴⁹。

『日本薬局方』が規定する「ケイヒ」（桂皮）は、*Cinnamomum cassia* または同属植物の乾燥樹皮である。また真柳は、桂類薬物と薬名について以下のように述べている。馬王堆 3 号漢墓の出土医書（前 168 年以前）には薬名として、『五十二病方』に桂 9 回・美桂 1 回・菌桂 1 回、『養生方』に桂 3 回・菌桂 3 回、『雜療方』に桂 4 回の記載があるが、桂枝など他の桂類薬名は一切ない。また前 1 世紀～後 1 世紀頃の『流沙簡牘』と『居延漢簡』の医方簡には桂のみ各 2 回、1 世紀頃の武威出土医書には桂のみ 12 回の記載がある。当頻度から、漢代までの一般的名称は主に桂、ついで菌桂だったと推定できる。また桂・菌桂の具体的相違は不明だが、薬名に桂枝は使用されていない可能性が高いとする⁵⁰。

なお「桂」は『説文解字』には「江南の木、百薬の長」とある。

前章で取り上げた里耶秦簡の薬方には以下の処方に、「菌桂」が用いられていた。「●七、^{にわか} 病暴にして心痛灼灼とする者、之を治す。析（^{しん} 荇）^{まき} 蕞實、^あ 治すこと、二。枯樞（^{たか} 薑）、^{きんけい} 菌桂、^あ 治すこと、各一。凡そ三物并せて和し、取ること三指もて撮まみ、^{せう} 節二に到る、^あ 温醇酒（にわか）に激しい心痛（胸の痛み）で、焼けるように激烈な痛みがあるものを治療する処方として、荇蕞子を搗いたものを二、乾姜、菌桂を搗いたものをを、各々一ずつ。これらを混ぜて三本の指で第二関節までの量をつまんで、温ためた醇酒で飲む」というものである。

⁴⁷ 『新版神農本草経』p.113、長石。味辛寒。主身熱、四肢寒厥、利小便、通血脈、明目、去翳、眇、下三蟲、殺蠱毒。久服不飢。一名方石。生山谷

⁴⁸ 『秦漢簡牘醫方集注』で、残方とされるものにこれらの薬物名がみられる。『秦漢簡牘醫方校釋』では、「^{しん} 葶」は「鳥頭」、「^{うず} 芒」は「芒草」すなわち「莽草」と解している。「鳥頭」はトリカブト (*Aconitum camichaeli* Debx.) の母塊根、『神農本草経』下品に記載。「芒草」莽草は、『中薬大辞典』p.2492 では「狭葉茴香 (*Illicium lanceolatum*)」『本草経集注』石桂、紅桂『新訂和漢薬』では「シキミ科シキミ (*Illicium anisatum*, L) の樹皮、葉、果実」『神農本草経』下品に記載。「蘭草」はフジバカマ (*Eupatorium fortunei* Turcz) の茎、葉、花、『神農本草経』上品に記載。「艾」はヨモギ (*Artemisia argyi*) 『神農本草経』に未記載、『新修本草』には記載される。「鳥頭」「莽草」は、いずれも毒性をもつ、『里耶秦簡』では、「鳥頭と莽草等の植物の果実十……」とあるが、使用目的・方法は不明である。

⁴⁹ 真柳誠「中国 11 世紀以前の桂類薬物と薬名—林億らは仲景医書の桂類薬物名を桂枝に統一した」、『薬史学雑誌』1995 年 30 巻 2 号、pp.96-115。

⁵⁰ 同上、真柳誠論文。

桂類薬物は、『神農本草経』では、木部上品に「菌桂」と「牡桂」の記載がある⁵¹。

「菌桂」は「菌桂、味は辛、温。百病を主る。精神を養い、顔色を和らげ、諸薬の先聘通使と爲る。久服せば身軽くし老いず。面は光華生じ、媚好なること、常に童子の如し。山谷に生ず」とあり、孫思邈らはここに『名醫』に曰く、交址、桂林の巖崖間に生ず。骨無く正圓なること竹の如し。立秋に採ると。案ずるに『楚詞』に云う、申椒⁵²と菌桂と雜ると。王逸云く、桂は皆香木なりと。『列仙傳』に云う、范蠡、桂を服するを好むと」と注す⁵³。

一方、「牡桂」は「牡桂。味は辛温。上氣咳逆、結氣喉痹、吐吸を主る。關節を利し、中を補い氣を益す。久服すれば神に通じ、身を軽くし老いず。山谷に生ず」とあり『名醫』に曰く、南海に生ず。案ずるに『説文』に云う、桂は、江南の木、百薬の長、檜桂なりと。南山經に云う、招搖の山に桂多しと。郭璞云う、桂、葉は枇杷に似て、長さ二尺余り、廣さ數寸。味は辛。白花。山峰に叢生し、冬夏常に青く、雜木に間無しと。『爾雅』に云う、檜は、木桂と。郭璞云く、今の人、桂皮の厚き者と呼ばて、木桂と爲す、及び単に桂と名づくは、是れなり、一名に肉桂、一名に桂枝、一名に桂心と」と注される⁵⁴。いずれも長期に服用（久服）すれば、身軽くし老いない（輕身不老）とされる。また「范蠡」以外に『列仙傳』には「桂」を服す記載が以下のように4例ある。

「彭祖なる者は、殷の大夫なり。姓は鏗、名は鏗。帝顓頊の孫、陸終氏の中子なり。夏を歴て殷の末に至るまで、八百餘歳なり。常に桂・芝を食らい、導引行氣を善くす。歴陽に彭祖の仙室有り。前世に禱りて風雨を請うに、輒ち応ぜざる莫し。常に兩虎有りて、祠の左右に在り。祠り訖われば、地に即ち虎の跡有り」と云う。後、昇仙

⁵¹ 『中薬大辞典』p. 1221の「肉桂」の項には、「肉桂『新修本草』」「異名：菌桂『離騷』、牡桂『本経』、桂『別録』、大系、筒桂『新修本草』……」「基原」は「樟科樟属植物肉桂的干皮、桂皮」「原植物」は「1. 肉桂 *Cinnamomum cassia* Presl [*Laurus cinnamomum* Andr. ; *L. cassia* C. G. et Th. Nees] 又名：桂木『山海經』、檜、木桂『爾雅』、桂樹『爾雅』郭璞注。2. *Cinnamomum cassia* Presl var. *macrophyllum* Chu」とある。『新訂和漢薬』では「桂」は「クスノキ科ケイ *Cinnamomum cassia*, Bl. の樹皮、根、子実」「樹皮：牡桂（根皮）、桂心（幹皮）、桂枝（樹枝）の別あり」とする。また「肉桂」は「クスノキ科ニクケイの樹幹皮、根皮（牡桂も肉桂という）」、「菌桂」は「クスノキ科セイロンニクケイの樹皮」とあり一致しない。

⁵² 「申椒」、香木名。即大椒。「大椒」、花椒（サンショウ）

⁵³ 『新版神農本草経』p. 69、「菌桂味辛、温。主百病、養精神、和顔色、為諸薬先聘通使。久服輕身不老、面生光華、媚好常如童子。生山谷。『名醫』曰、生交址桂林巖崖間、無骨、正圓如竹、立秋採。案『楚詞』云、雜申椒與菌桂兮、王逸云、桂皆香木、『列仙傳』云、范蠡好服桂」

⁵⁴ 『新版神農本草経』p. 68、「牡桂。味辛温。主上氣咳逆、結氣喉痹、吐吸、利關節、補中益氣。久服通神、輕身不老。生山谷。『名醫』曰、生南海。案『説文』云、桂、江南木、百薬之長、檜桂也、南山經云、招搖之山多桂、郭璞云、桂、葉似枇杷、長二尺余、廣數寸、味辛、白花、叢生山峰、冬夏常青、間無雜木、『爾雅』云、檜、木桂、郭璞云、今人呼桂皮厚者、為木桂、及單名桂者、是也、一名肉桂、一名桂枝、一名桂心」

して去る」⁵⁵

「范蠡、字は少伯、徐人なり。周に事えて太公望を師とす。好んで桂を服し、水を飲む。越の大夫と為り、勾踐を佐けて呉を破る。後、輕舟に乗りて海に入り、名姓を變えて齊に適き、鴟夷子と為る。更に後百餘年にして陶に見れて、陶朱君と為る。財累むこと億万、陶朱公と號す。後、棄てて蘭陵に之き、薬を賣る。後人、世世之を識見す」⁵⁶

「桂父なる者は、象林の人なり。色黒くして時には白く、時には黄に、時には赤し。南海の人、見て尊びて之に事う。常に桂及び葵を服し龜腦を以て之に和す。千九に十斤の桂なり。累世之を見る。今、荊州の南に尚お桂丸有り」⁵⁷

「谿父なる者は南郡鄱の人なり。山間に居るに、仙人有り、常に其の家に止どまる。従いて瓜を買い、之に瓜子と桂・附子・芷實とを鍊るを教う。共に藏して春分に之を食らう。二十餘年にして能く飛走し、山に昇り水に入る。後、百餘年、絶山の頂きに居り、谿下の父老を呼び、與に平生の時の事を道うと云う」⁵⁸

秦の始皇帝や漢の武帝は、神仙の存在を信じ不老不死の仙人となることを望んだ。『列仙伝』は七十の話を記す。そこに仙人となる具体的な方法を記載している。辟穀（穀物を食べない）、調息（呼吸法）、導引（体操）、房中（男女の交接術）などもあるが、最も多いのが服薬である。『列仙伝』には薬物が50種類あらわれるが⁵⁹、そのうち「桂」を服用するのが4例である。「桂」は不老不死の仙薬の代表といえるだろう。「桂父」「谿父」は「桂」を材料として用い製薬をする。「桂父」の薬は桂丸と呼ばれる丸薬である。また「桂父」に見える「象林」（ベトナム）の地名は、現在の産地に一致する。東南アジア原産の「桂」が、これほど早い時期に薬用とされていることも注目するべき点であろう。

ところで図1は漢代の墓から出土した製薬工具



図1 漢代墓出土の製薬工具。(左) 前漢、徐州楚王墓出土(右) 前漢、山東巨野出土

⁵⁵ 平木康平、大形徹「列仙伝」、『鑑賞中国の古典9、抱朴子・列仙伝』角川書店、1988年、p. 198。

⁵⁶ 同上書、p. 219。

⁵⁷ 同上書、p. 235。

⁵⁸ 同上書、p. 289。

⁵⁹ 同上書の解説文を参考にした。

である⁶⁰。同様の道具を用いて製薬することは漢代の画像石のなかにも見える。図2⁶¹の山東省の沂南漢墓門では、東立柱に臼を搗く羽人が描かれ、西立柱に臼を搗く兔が描かれる。いずれも薬を製薬しているのであろう。この薬は不老不死の薬と考えて間違いないだろう。

羽人像の画像については、北村永の考察があり、羽人は仙人であると結論している。⁶²

図3左図の榆林南梁墓門右柱画像⁶³では、上部中央に扶桑とされる樹木が描かれ、その下部左側に羽人、下部右側に臼を搗く兔が描かれている。図3右図⁶⁴の曲阜出土の立鶴、玉兔搗薬画像では両翼の羽を持つ兔が臼を搗いている。

一方、図4⁶⁵の四川省彭州市から出土した東漢の画像磚では、月を示す月神の内部に、蟾蜍と桂樹が描かれている。



図2. 沂南漢墓門。(左) 西立柱画像 (右) 東立柱画像



図3. (左) 榆林南梁墓門右柱画像 (右) 立鶴、玉兔搗薬画像

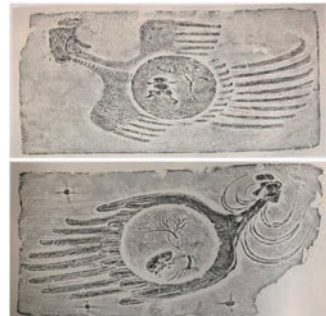


図4. 月神畫像磚・東漢。(上) 四川省彭州市太平郷出土 (下) 四川省彭州市義和郷出土

⁶⁰ 廖育群『重構秦漢医学図像』上海交通大学出版社、2012年、p.71。

⁶¹ 中国画像石全集編輯委員会編『中国美術分類全集 中国画像石全集1 山東漢画像石』山東美術出版社、2000年、p.134。

⁶² 北村永「羽人像を中心とする「漢代神仙世界図」考」、『美学』44(2)、美学会、1993年、pp.57-68。

⁶³ 中国画像石全集編輯委員会編『中国美術分類全集 中国画像石全集5 陝西、山西漢画像石』山東美術出版社、2000年、p.9。

⁶⁴ 中国画像石全集編集委員会編『中国画像石全集2 山東漢画像石』山東美術出版社、2000年、p.18。

⁶⁵ 中国画像磚全集編輯委員会『中国画像磚全集1 四川漢画像磚』四川美術出版社、2006年。(上)四川省彭州市太平郷出土「画面中一羽人、人首鳥身、頭梳髻、腹部有一圓輪、輪中有蟾蜍、桂樹。羽人似展翅嚮左飞翔、與一六九國日神相配」(下)四川省彭州市義和郷出土「画面中羽人人首鳥身、頭上梳髻、頸部有羽、腹有圓輪、輪中有蟾蜍、桂樹、桂樹的枝幹和根鬚清晰可辨。主幹上繫有一串珠狀物。蟾蜍甸甸於佳樹下。此磚羽人人首和羽毛皆用錢條勾勒清楚。羽人在三顆光芒四射的星辰擁戴下臨空飞翔」

時代が下り天理大学付属天理参考館所蔵の唐代「桂樹月兔八稜鏡」⁶⁶といわれる鏡には、鏡背に中央に桂樹、樹の左右には飛雲に乗った仙女と白を搗く兔、樹の根元には蟾蜍が描かれる。桂樹、不老不死の薬を作る兔、仙女など不老不死の神仙的な世界を表現している。



図 4. 桂樹月兔八稜鏡

おわりに

『里耶秦簡』では、「菌桂」は、「病暴^{にやみ}にして心痛灼灼とする者」の治療薬の材料であった。「病暴^{にやみ}にして心痛灼灼とする」というこの疾病は、今でいうならば、「焼け火箸でかき回されるような痛み」ともいわれる心筋梗塞のような病であったのだろうか。仮にそうだとすれば生命に危険を及ぼす状態である。この時、起死回生に「菌桂」が用いられていたとするなら、「菌桂」は重要な薬物であり、命を長らえる薬物と捉えられていても不思議はないのだろう。

岡西は『本草経』を「神仙的と医療的との二つの要素が混在していた」という。同様に、薬物は「本来の薬効」と「イメージからくる薬効」という二つの要素があわさっていたのであろう。「桂樹月兔八稜鏡」に表現されている月の桂樹のモチーフとなった「桂」は、早い時期から神仙的な「不老不死」のイメージをもっていたと思われる。今後、『里耶秦簡』の全貌が公開されれば、さらなる検討を加えたい。

参考文献

赤松金芳『新訂和漢薬』医歯薬出版社、1970年。

遠藤次郎、鈴木達彦「馬王堆出土『五十二病方』にみられる薬の作り方の意義」『日本医史

⁶⁶ <https://www.sankokan.jp/selection/antiquities/keijugettohatiryokyo.html> (2019年10月28日閲覧)

学雑誌』第 55 卷第 2 号、2009 年。

大形徹「薬物から外丹へー水銀をめぐる古代の養生思想ー」、『道教の生命観と身体論』、雄山閣出版、2000 年。

岡西爲人『本草概説』創元社、1977 年。

川田伸一郎等「世界哺乳類標準和名目録」、『哺乳類科学』第 58 卷別冊、2018 年。

北村 永「羽人像を中心とする「漢代神仙世界図」考」、『美学』44(2)、美学会、1993年、pp. 57-68。

湖南省文物考古研究所編著『里耶秦簡〔壹〕』文物出版社、2012 年。

湖南省文物考古研究所編著『里耶秦簡〔貳〕』文物出版社、2017 年。

小曾戸洋『新版漢方の歴史』大修館書店、2014 年。

吳普述、孫星衍・孫馮翼輯『新版神農本草經』文光図書、2000 年。

張雷『秦漢簡牘醫方集注』中華書局、2018 年。

中国画像石全集編輯委員会編『中国美術分類全集 中国画像石全集 1 山東漢画像石』山東美術出版社、2000 年。

中国画像石全集編輯委員会編『中国美術分類全集 中国画像石全集 5 陝西、山西漢画像石』山東美術出版社、2000 年。

中国画像磚全集編輯委員会『中国画像磚全集 1 四川漢画像磚』四川美術出版社、2006 年。

陳藏器撰、尚志鈞輯『本草拾遺輯』安徽科学技術出版社、2002 年。

唐慎微著、郭君雙・金秀梅等校注『証類本草』中国医薬科技出版社、2011 年。

南京中医薬大学編『中薬大辞典』第 2 版、2006 年。

平木康平、大形徹「列仙伝」、『鑑賞中国の古典 9、抱朴子・列仙伝』角川書店、1988 年。

真柳誠「老官山漢墓出土『六十病方』の知見」、『日本東洋医学雑誌』第 70 卷別冊号、2019 年。

真柳誠「中国 11 世紀以前の桂類薬物と薬名一林億らは仲景医書の桂類薬物名を桂枝に統一した」、『薬史学雑誌』1995 年 30 卷 2 号、pp. 96-115。

森立之『本草経考注』学苑出版社、2002 年。

李時珍『本草綱目』三版、国立中国医薬研究所出版、1988 年。

廖育群『重構秦漢医学画像』上海交通大学出版社、2012 年。